



Title	子宮頸癌の免疫組織学的研究
Author(s)	山崎, 正人
Citation	大阪大学, 1984, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/34905">https://hdl.handle.net/11094/34905</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	山	崎	正	人
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	6586	号	
学位授与の日付	昭和59年8月6日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	子宮頸癌の免疫組織学的研究			
論文審査委員	(主査) 教 授 川島 康生			
	(副査) 教 授 森 武貞 教 授 北村 旦			

### 論文内容の要旨

#### (目的)

子宮頸癌に於ける、種々抗原 (Isoantigen, carcinoembryonic antigen, human chorionic gonadotropin, 基底膜抗原) の消失・発現, argyrophil cell を有する頸癌に於ける種々のペプタイドホルモンの局在を免疫組織学的に検討した。更に、argyrophil cell を有する頸癌の臨床・病理学的検討も加えた。

#### (方法および成績)

子宮頸癌の術後標本を10%ホルマリン固定し、5切片を作成し、isoantigen, CEA, hCG 及びペプタイドホルモンの検出には、Masonら或いはSternbergerらの酵素抗体法により染色を行なった。基底膜抗原については凍結切片を作製し、蛍光抗体法を用いた。

#### 抗体

抗-Aは家兎、抗-Bは山羊にて作製された抗体を東京標準血清より、抗-CEA抗体は森武貞教授、抗-hCG抗体は谷沢修助教授より、それぞれ、提供を受けた。抗基底膜抗体は、bullous pemphigoid患者血清を用いた。抗-gastrin, 抗-calcitonin, 抗-adrenocorticotropic hormone (ACTH) はDaco社 (USA)。抗-somatostatin, 抗-glucagonはMilab社 (Sweden)。抗-vasoactive intestinal polypeptide (VIP), 抗-Met-enkephalinはUCB社 (Belgium) よりそれぞれ求めた。Rabbit anti-peroxidaseはCappel社, peroxidase type 11はSigma社, 家兎PAP試薬はMiles-Yeda社, 山羊PAP試薬はCappel社よりそれぞれ求めた。

1. Isoantigenの検討では扁平上皮癌35例 (上皮内癌11, 微小浸潤癌11, 浸潤癌13), 腺癌24例 (上皮内癌4, 浸潤癌20) について行ない, isoantigenの消失は浸潤性格とともに著明となる。微小浸潤癌

では非浸潤部は上皮内癌と、浸潤部は浸潤癌と類似の傾向を示した。腺癌では上皮内癌4例全て、浸潤癌26例中8例が陰性であった。

2. CEAの検討では、扁平上皮癌68例（上皮内癌27、微小浸潤癌21、浸潤癌20）、腺癌16例、リンパ節転移巣4例（扁平上皮癌3、腺癌1）について検討を行ない、上皮内癌27例中11例、微小浸潤癌21例中16例、浸潤癌20例中17例に陽性であり、転移リンパ節については、腺癌1例及び扁平上皮癌3例の内2例は原発巣と転移巣共に陽性であった。腺癌では27例中23例に陽性所見が認められた。上皮内腺癌は4例中1例のみ陽性であった。
3. hCGでは、扁平上皮癌52例（上皮内癌19、微小浸潤癌5、浸潤癌28）腺癌は27例（上皮内癌4、浸潤癌23）について検討を行ない、扁平上皮性のものは、上皮内癌19例中0、微小浸潤癌5例中1例、浸潤癌28例中6例に陽性所見が認められた。分化度別にみると、高度分化型4例中3例、中等度分化型13例中3例、に陽性で、未分化型11例は全て陰性であった。腺癌では上皮内癌は全て、浸潤癌23例中21例が陰性であった。
4. 基底膜抗原については、扁平上皮癌による基底膜の破壊の有無を31例の扁平上皮癌（上皮内癌3、微小浸潤癌1、浸潤癌27）で検討した。基底膜は正常扁平上皮では全てに、上皮内癌3例中3例、浸潤癌27例中7例に陽性所見がみられた。しかし、微小浸潤癌で分化像を示す部分に基底膜は認められなかった。
5. Argyrophil small cell carcinomaについては大阪府立成人病センターでの153例の扁平上皮癌について、組織学的特徴により、15例を選び、Grimelius染色を施行した。8例が陽性であった。以前に発表された5例を含めて、13例の臨床経過を検討した。更に、これら腫瘍のうち切片の得られる5例についてはペプタイドホルモンの局在をみた。5年以上経過観察出来た9例中7例は死亡した。ペプタイドホルモンの免疫組織学的検討ではgastrinのみが5例中2例に認められた。腺癌については、当産婦人科に於ける30例について同様の検討を加えた。Argyrophil cellを有する腺癌では、4例中3例は5年以上、残り1例は3年生存している。ペプタイドホルモンの免疫組織学的検討では、somatostatinとgastrin、gastrinのみ、ACTHのみが、それぞれ1例ずつに認められた。

#### （総括）

1. 子宮頸癌に於けるisoantigenの消失を免疫組織学的に示し、特に、微小浸潤癌では浸潤部位と非浸潤部位がそれぞれ浸潤癌と上皮内癌に類似することを明らかにした。
2. CEAの陽性率は浸潤性格とともに高くなり、分化した癌細胞に陽性所見が強い。腺癌では高率に陽性所見が認められ、陰性率の低い体部腺癌との鑑別に有効と考えられた。
3. hCGは未分化癌では陰性、中等度及び高度分化癌に陽性所見が認められた。腺癌では殆どの症例が陰性であった。
4. 子宮頸部扁平上皮癌での基底膜は上皮内癌の全てと浸潤癌の一部で保たれていた。微小浸潤癌では分化像を示す部分に基底膜は認められなかった。初期浸潤の際に基底膜は破壊され、後に間質の中で基底膜が再構成される可能性を示した。
5. Argyrophil small cell carcinomaは予後が極めて悪いが、argyrophil cellを有する腺癌では通常の

腺癌と予後に於いて差が認められなかった。免疫組織学的に少数のペプタイドホルモンを示した。

#### 論文の審査結果の要旨

子宮頸癌における種々抗原（同種抗原、癌胎児抗原、ヒト胎盤性ゴナドトロピン、基底膜）の消失・発現、好銀細胞を有する頸癌における種々のペプタイドホルモンの局在を免疫組織学的に検討した。同種抗原及び基底膜抗原は浸潤とともに消失する傾向を示し、癌胎児抗原、ヒト胎盤性ゴナドトロピンは浸潤とともに出現する傾向を示したことは腫瘍の性格診断に意義がある。好銀性小細胞癌は極めて予後が悪いが、好銀細胞を有する腺癌の予後は通常の腺癌と差なし。

免疫組織学的にガストリン、ACTH、ソマトスタチンを示したことは他に報告がなく、学位論文に値すると審査された。